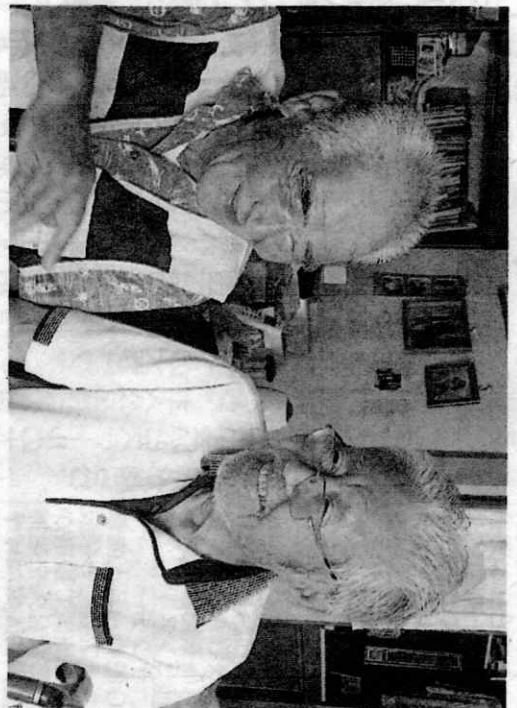


2023.10.8 朝日(朝)

# あいつは人生の一部

## 窓



小林實幸さん(左)は退院した齊藤維夫さんを見舞うために自宅を訪れ、再会を喜び合った11月5日、千葉市緑区

携帯電話の向こうで、言葉にならない声が聞こえる。「ああ、うー」橋本郡福岡県宮若市の小林實幸さん(82)は電話口で叫んだ。「おい、どげんした電話の相手は、高校時代の親友、齊藤維夫さん(82)。千葉市でひとりの暮らしをしてる。呼びかけても、返ってくるといふ。何かが起きてる」。いつたん電話を切り、齊藤さんの家族の連絡先を探したが、メモが見つからない。「一刻を争つかもしれない」と意を決し、だめもとつもりで11回番に電話

をかけた。「千葉の救急に電話をしただけで、どうしたら良いですか」

8月7日のことだ。

ことにした。あの日は、小林さんの当番だった。

小林さんの通報を受けた地元の消防本部は、約1千

名離れた千葉市の指令センターに電話を転送。すぐに

救急車が向かった。脳梗塞だった。すばい

通報のおかげで齊藤さんは一命を取り留め、約2週間

で退院できた。当日のこと

は、「よく覚えていない」と言う。

1カ月後、小林さんは齊藤さん宅を訪ね、肩をたた

き合って再会を喜んだ。齊藤さんは言葉が出なくな

り、歩行に杖が必要だが、身のまわりのことはでき

る。小林さんは、父から

継いだ会社を九州屈指のメガ

1カ月に育てたが、60歳前

で大手スーパーにやむなく

売却。喜びと悩みを2人で

分かち合い、いくつもの山

を乗り越えた。「あいつの存在は、自分の人生の一

部」と小林さんは言う。

3年前、齊藤さんは50年

連れ添った妻を亡くした。話し相手は猫だけで、家にこもりがちな毎日。電話で連絡がとれなくなることもあった。「このまま放つておけない」。小林さんは、もう1人の旧友と話し合

い、2人で当番を決め、週に1、2度、電話をかける

る。(本山秀樹)